

昨年7月3日付「日本人ゲリラ」で、ビルマ軍市政権に抵抗するカレン族の義勇兵として紹介した西山孝純さん(当時三二)が十一月、マリアラのためタイで亡くなった。現地で出会い、親しかったフオトジャーナリストの宇田有三さんに、生前の活動ぶりを伝えてもらった。

日本人ゲリラの死

昨年一月、ビルマ・カレン族に日本人義勇として戦闘に参加していた西山氏の訃報を受け取った。一時帰国していた東京で、慢性のマリアラを再発させたが、熱帯病の治療は、タイの方が進んでいる」と、弱った体で日本を発った。その後、現地で肺炎を併発させ、タイ・バンコクの病院で息をひきとった。

彼は、カレン族との出会いを、成り行き(縁)だったと話していた。大学を中退し、冒険心を抱いて東南アジアを回っていた二〇代半ば、彼が出会ったのは、半世紀に及ぶビルマ辺境の武装抵抗闘争

であった。

最初は、戦場という強い刺激のある場に、生き甲斐を求めただけだったのかもしれない。だが、カレン族の自由を求める戦いに参加するにつれ、彼はカレン族を深く理解するようになった。歴史から忘れ去れた民族の戦いが目の前あったのだ。

「カレン族というだけで略奪され、強姦され、果ては殺され続けている」

それを放ってはおけなかった。また、若い彼は知りたかった。カレン族が大きな暴力に屈することなく、どうして四九年間も闘ってこれたのか。彼がそこで見たものは、自由を求める人の力強い姿であり、助け合う人間同士の優しさだったようだ。

タイ・ビルマ国境のホテルに滞在中、取り立てて用事も無いのに、よく彼から電話がかかってくる。体力と気力の限界の最前線から町に戻ったとき、妙に人恋しくなる。自分もそうだった。その気持ちを分かち合える人は、経験した者同

士でしかできない。平和な町を見ていると寂しさがこみ上げてくる。今、思うに、私は彼とその寂しさを分かち合えていたようだ。

対外的には義勇兵士としての顔を表に出していたが、カレンのためにさまざまな仕事をこなしていた。日本に戻ると、建設現場や引っ越しのアルバイトをしてお金をため、カレンの人たちが必要とする医薬品を買ったり、子どもたちのためにおもちゃや文具品なども買い揃えていた。難民のお米を買い、お金を都合するため、日本の援助団体を回ったりもしていた。

ここ数年は、戦闘に参加するより、カレンの人たちと移動診療隊を組織して、山深いカレンの村に入っていた。実戦に参加する体力がなくなってきたり、自分にできることを精一杯やり遂げようとした。村には入ってくれるな、カレン民族同盟に関係する者が村に来ると、それだけでビルマ政府軍から略奪や虐待を受ける」

医薬品を持って、苦勞して山越えをしてたどり着いたカレンの村

で、村長から言われた。その言葉を聞いた彼は、怒りを通り越して悲しんだという。カレン民族のために命を失った多くの戦友は何のために闘ってきたのか。自分も銃を持つてきただけにやりきれなかったという。

カレンの武装闘争で、命を落とした外国人義勇兵の中には日本人もいた。彼は、Iが自分より先に逝ったことに負い目を感じていた。Iをカレンの101部隊に紹介したのも彼だと聞いている。それもあって、どんなつらいことがあってもカレンから手を引くことができなかったようだ。先に逝った多くの戦友に少しでも近い現地で仕事をする必要を感じていた。

人は、「死に方や場所を思い通りに選ぶこと」をできない。前線に立つてきた彼は、敵・味方にかかわらず多くの死を見てきた。それだからこそ、自分は「生きる場所と時間を選択した」と書き残している。自分を追い込んだ生き方だった。私は彼の具体的な行動に純

粋さを感じる。

日本人を知っているカレンの人が真っ先にあげるのは彼の名前だ。現在のビルマ軍事政権に与する日本企業のこと、が現地で話題に出るとき、私には彼の存在が唯一の罪滅ぼしだった。

彼は、カレン族の実状を知ってもらうために、パソコンでホームページ作りに夢中になっていた。日本に戻ってパソコンの使い方が分からなくなると、時間に見境なく、真夜中であっても電話をかけた。深夜二時、三時であろうと容赦はなかった。今でも、夜遅くまで起きていると、彼からの電話が鳴るような錯覚にとらわれる。

彼の遺灰の一部は、タイ・ビルマ国境、カレン州にもっとも近いモエイ河に流された。

・難民キャンプを撮影する西山孝純さん
タイ・メソットで



(一九七七年六月一〇日撮影)

ライター

自分の「ぼやき」写し込む

写真を始めたのは、二十代も半ば過ぎだった。それまで自分のカメラなんて持ったことがなかった。どちらかと言えば、写真を毛嫌いしていた。仕事を辞めて海外で生活していくのに、写真の技術だけでも覚えておけば、何かの役に立つだろうと思った。

フォトジャーナリズムの本場アメリカで写真を学び始めて最初の半年間、いわゆる35ミリカメラは持たせてもらえなかった。ただひたすら、四×五インチ判の重い、蛇腹のついた大型カメラだけを使っていた。

何を撮るにも、カメラのセッティングが大変だった。いちいち三脚を立ててカメラをセットし、露出計を使って露出を測り、シャッタースピードを決め、黒布を頭からかぶり、ルーペでピント合わせをして……。

一枚の写真を撮るのに設定しなければならぬことが山ほどあった。住んだ場所がボストンだったのもきつかった。冬の寒さは半端ではない。零下十度を超える中、凍える体にむち打ち、ヒューヒュー

をつきながら被写体を求めて歩き続けた。

そこまでして、何で写真を撮ろうとするのか。それが自分の性格を意識し始める第一歩だった。

担当の教官は、カラー写真全盛のこの時代、いまだに白黒写真に執着しているこだわりの人だった。そんな教官に当たったのも、ある意味で幸運だった。

作品批評の時、彼はよく言った。「どうしてこの時間に、この場所で、この被写体に、この構図で、この露出とこのシャッタースピードで撮影し、どうしてこのような形で写真に焼き付けたのか」。くどかった。

そして「写真の第一歩は、自分の頭に染みついた既成概念を認識し、それを壊すことから始めなければならない」というのが彼の持論だった。それは、つまりこういうことだ。

人は、自分の生きている時代や社会環境の制約から逃れることはできない。映像の世紀といわれる今の時代、子供の頃から写真やテレビに囲まれる生活が当たり前となった。人が作り出す映像作品は、どこかでその制約を反映している。日常生活では無意識的に、誰かの作った映像を通して、社会的制約や、その背景にあ

る思想を植え付けられている。

独創的な作品を作り出そうとすれば、自分がどんな形でどんな影響を受けてきたのか知らなければならぬ。そこが出発点。ある意味で、自己を見つめ直す作業である。

その手助けとして、写真の授業なのに詩や評論を読み、議論した。そうした訓練のおかげで、自分が何者か、ぼんやりとつかむことができるようになった。そのうち、狭い三五ミリカメラのファインダーをのぞいて見えるのは、単なる被写体の姿だけでなくなった。私は、自分の社会観を写し込もうとし始めていた。

私は理屈屋で、よく文句を言う。でも、カメラを握ると素直になることができる。写真で具体的な「ぼやき」を吐き出し、落ち着くことができるのだ。

写真キャプション

・私の写したエルサルバドル 首都サンサルバドルのメルカード（市場）で。